
俺の妹は世界で一番可愛い

白野ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹は世界で一番可愛い

【Nコード】

N5985X

【作者名】

白野ハル

【あらすじ】

けいおん！の二次作品です。

似たような内容があるかもしれませんが読んでいただければ嬉しい限りです。

初投稿なので駄文かもしれませんがそれでも大丈夫の方は読んでください。

俺が妹に恋をするかもしれない(前書き)

ネタですが、どうぞ。

俺が妹に恋をするかもしれない

俺が今から語る事は全て妹の事である。

この世に唯一人しかいない俺の妹は兄の俺が言うのもあれだが・・・いや、兄である俺が言わなければ意味がないであろう。

俺の妹は「世界で一番可愛い」のだ。

その妹を持つ兄の俺は世界で一番の幸せものであろう。

そんな俺を赤の他人から見ればかなりシスコンが入った危ない奴と思われるかも知れないが、それはそれで結構な話である。

俺の事をシスコンと呼びたい奴には呼ばせておけばいいのだ（実際俺の友達からはそう呼ばれているのだが）、俺の妹に対する兄弟愛はそんな事では揺るぐことはない。

最近では兄の俺を慕い同じ高校に入学してきのだ。高校に入った妹は益々美しさに磨きが懸かり、俺の目には妹から極光がかかる始末でさえある。

だが近頃妹は俺に対して少し態度が冷たい・・・少し遅めの反抗期みたいなものだろうか？

いやいや、俺の考えすぎに違いない。

そうだと俺は信じてるさ。

そんな妹が最近ちょっと様子がおかしい様な気がする。何か必死に考えてる気がした。それは妹を何年も見続けていた家族にしか分からない勘だった。

となれば兄が妹の力になってあげるのは当然の事である。

俺は妹の悩みを聞くため自分の部屋から移動する。

未来の俺はこう思うだろう、「あの時にその行動を取らなければ違
う未来もあったのである。」

いや、そもそも俺がそんな事できる訳がない、それにドラマや小説
などでよくある話だが「未来は既に決まっている」という言葉が。

正直決まったレールの上をただ走りつづけるなんて事は真っ平御免
である。

俺は自分の道は自分で走り続けていきたいと思ってるからね。

だけど俺がとつた行動は既に決まっている未来に続いてるかもしれ
ないが、それはそれで構わない。

そう俺「中野 柳」の妹「中野 梓」が幸せであるなら、どんな未
来だって構わない。

「中野梓」

11月11日生まれ

身長150cm 体重46kg

血液型はAB型である。

現在は桜が丘高校に通う女子高生で、趣味は両親のジャズバンドをしていた影響で確か小学4年生ぐらいの時からギターを弾き始めていた。

兄の俺とは違い両親から音楽の才能を頂き、いや兄の俺とは違い音楽に対する気持ちが大いにあったであろう。

因みに俺も昔はギターをやろうとしたが親父に「男ならスポーツ！いや、野球だ！」と言われ汗かく競技に変更になったのだ。

性格は真面目でしっかりしているし、勉強、運動は中の上といった所でまさに文武平等である。スタイルは他の娘よりやや見劣りする所があるかもしれないが、兄の俺にとってみればむしろ加点評価で、その全てが俺の妹をより美しくする為の布石ではないのかと思ってしまう。

まあ、要するに一言で言うのであれば俺の妹は世界で一番可愛いのだ。

「傾国美女」と言う言葉を知っているだろうか。今俺は妹を見てそう思った。

学校から帰って来たばかりで制服のままソファアの上に座っている我が妹梓。

正に妹の為に用意された言葉ではないであろうか、一瞬俺は真剣に考えてしまった。

と、その時に

「なにしてるのお兄ちゃん？」

考え込んでいる俺に梓は声をかけていた。

「いや、なんでもない・・・それより梓今帰ってきたのか？随分遅かったみたいだけど・・・」

「うん・・・ちょっと部活見学に行ってたから」

と一つ答えるのにも気品を感じれる。

それにしても部活か・・・梓の事だから音楽関係かな？

俺がそれとなく聞いてみると、

「うん、ちょっと今まだ考えているから決まったら教えるね」と言い二階の自室に戻っていった。

そういえばウチの高校って音楽関係の部活はどの位あったけ？ 確か

ジャズ、吹奏楽・・・あ、後は軽音の三つだった筈だ。

なるほど・・・梓は今どっちにするか悩んでるんだな。ジャズか軽音に・・・

ここで兄として俺が取るべき方法は一つしかないであろう。

そう妹の笑顔を見れば良いただそれだけだった。

俺が妹に恋をするかもしれない(後書き)

感想等ありましたらお願いします。

俺が妹に恋をするかもしれない？

その日の晩、家族四人でテーブルを挟んで食事をしている時だった、突然親父が、

「梓、お前高校はどうだ？」

と梓に聞いた。

「どうって何が？」

「何が？じゃなくて高校が始まって一週間経って馴れてきたとかあるだろそういう話だよ」

と親父は梓に説明しているが・・・

（我が親父ながらもの凄いバカっぽい話し方だな・・・いつもの事だが）

「そうですね、私も聞きたいです梓」

母さんも梓に答えを求めている。

「うーん、大分馴れてきたよ、中学の友達も何人かいるしクラスの子とも仲良くなれたし」

まあ俺達を通う高校はいたって普通の高校だし、変わっていると見えれば少し前まで女子高だったぐらいであろう。

「クラスに気になる奴とかはいないのか？」

親父は笑いながら梓に質問する。

（ナイス質問だ、親父！）

梓は少し困った顔をし、

「えー、わかんないよそんな事」

と答えるだけだった。

「なんだなんだ、最近のガキは俺の可愛い娘に積極的にアピールする奴はいねーのか、まあもしも良い奴がいたら連れてこい、俺が判断してやるぜ！」

「えー・・・」

返答に困る梓を見ながら親父は喋り続ける。

「まあ、当然娘はやらんがな」

と決め台詞を吐く。

「ふっ、親父一つ忘れてるぜ」

「なんだバカ息子よ」

俺は口の中のご飯を飲み込みこつ告げた。

「まずは親父の前に兄である俺が妹に相応しいかどうか判断するぜ
！！！」

「・・・何言ってるのお兄ちゃん？」

隣で梓は俺の発言に呆れているが、

「柳よ、俺は今お前を生んで一番良かったと思ってるぞ」

と親父は笑みを浮かべながら答えてくれた。

「アンタからは生まれてきてはいないが・・・サンキュー親父」

俺がそう言った後で笑いあう親父と俺がいた。そんな二人を見て呆れた顔をする梓と同じく笑顔でいる母さんがいた。

少々変わっているがこれが内の家族である。

親父の名前は「中野一樹」

母さんの名前は「中野遥香」だ。

両親は高校の頃に俺を生んでいて二人とも年齢はかなり若い。

その頃の親父たちは物凄く大変だったと聞いたことがあるが、深くは知らない。
誰だってそうだろう、親の昔のなれ初めやその他諸々などを興味があつて聞くなんて事はないと思う、子供であれば・・・

先程の話に戻るがもしも梓が本当に好きになつた男ができて家にもしも、もしも連れてきたら俺はどうするのだろうか？

大好きな妹の事を考えれば黙って見守るのが一番だろう、だけど俺にそんな事ができるのか？

いや、きつとできないだろう。

妹が嫌がるだろうが俺はその男をぶん殴ってしまうかもしれない。

勝手な兄貴だとは思うが俺はまだそこまで人間ができていないのだ。

翌日の朝。

俺はかなり早く起きていた。

正直早く起きるかどうかももの凄い悩んでいた。なぜその様なことに苦悩していたかと言うと・・・

朝は梓が俺を起こしに来るからだ。

寝坊する兄を起こす妹、そう俺は梓から起こしてもらつことに深く幸せを感じているからだ。

だから妹が起こしに来る前に起きててもわざと寝たフリだつてする。しかし梓は俺を起こすのは嫌なんじゃないかと最近思つ節が見当たるところがあるが俺は気づかないフリをする。

朝食を早めにとっていると梓が二階の階段から降りてきた。

「おはよう・・・あれお兄ちゃん今日は早いね」

「まあ、たまにはね」

俺のいつもと違う行動に少し驚く梓。

既に制服に着替えていて学校に行く準備は出来上がってる状態だった。

「それじゃあ、お母さん私行くね」

梓はそう言いながら玄関に向かう。

「母さん俺も行くから」

俺も梓の後を追うように玄関に向かったが梓は外にすでに出ていたので駆け足で後を追う。

「梓！」

「お兄ちゃん？どうしたの？」

「たまには妹と学校に行こうかなと思ってね」

「別にいいけど・・・」

「・・・あゝそういえば今日部活の歓迎会みたいのがあったよな？」

「うん」

「昨日たしか言ってたよな、どこにするか迷ってるって」

「・・・うん」

「歓迎会見に行ったらどうだ？ いいところが見つかるかもしれないぞ？」

「・・・」

「・・・梓？」

「・・・お兄ちゃんがそう言っただったら見に行く」

「・・・そっか」

そして俺も今日の歓迎会を見に行くことにした。

俺が妹に恋をするかもしれない？（後書き）

感想、ご意見等がありましたらお願いします。

俺が妹に恋をするかもしれない？

放課後になり歓迎会に向かおうとしていると、

「中野今日の予定空いてるか？」

クラスで比較的仲の良い友人国崎が声をかけてきた。

「悪いけど俺は今日大事な予定があるんだよ」

俺は国崎の誘いを断り歩き出そうとすると、

「いや、今日は大丈夫だつて」

国崎が俺の肩に手を置き俺の行動をとめる。

「何が大丈夫か知らないが、今日は本当にダメなんだよ・・・妹と一緒に新入生の歓迎会に行かないといけないんだよ」

俺が説明すると国崎は「妹絡みか」と呟いて納得してくれた。

「んでお前の妹は何の部活に入るんだよ？」

「多分ジャズ研か軽音学だと思うけど・・・あ、お前どっちかの部活に知り合いつている？」

俺が質問してみると、

「俺は直接はいないけど・・・確かお前の中学の田井中って奴が部長だった筈だぞ」

(・・・田井中？ そんな奴いただろうが俺の中学の知り合いに)

「知らねーな、んじゃ俺は行かせてもらうからな」

「ああ、じゃあなシスコン」

国崎は俺に嫌みで言ったのかどうか真意は分からないが・・・俺にとっては最高の誉め言葉である。

歓迎会に向かっている最中に梓から連絡がきた。

「お兄ちゃん、クラスの子ども一緒にいるけどいい？」

とメールがきたので返信をする。

「大丈夫」と一言だけ返す。

目的地の場所まで着くと梓ともう一人の女の子が待っていた。

「お兄ちゃん、遅いよ」

「悪い、ちよっと色々あつてさ」

俺は遅れた言い訳をするが特に色々あつたのではないが言葉遊びみたいなものだ。

「それでそつちの娘は？」

俺が訪ねると、

「えっと、同じクラスの平沢さん」

と梓が紹介してくれる。

「初めまして、平沢憂です」

と平沢さんが礼儀正しい挨拶をしてくれた。

ここは梓の兄としてしっかり答えねば。

「俺は2年の中野柳、宜しくな」

俺がそういうと平沢さんは「はい」と笑顔で答えてくれた。

(初対面で感じる印象は真面目で優しそうなイメージだな)

「君もどこかの部活に入るの？」

「いえ、私は一つ上の姉が軽音部にいるんでそれを見にきたんです
なるほど。」

「お兄ちゃんもう軽音部の演奏始まつてるよ」

梓が俺を急かすように言い、そのまま歓迎会への入り口を開き中へ
入る。

俺も続くように入ると演奏は一旦終了しててステージ上の真ん中

にいる娘が喋り始めていた。

「おねえちゃんボーカルなんだ」

平沢さんがお姉さんを見て驚いてるようだ。

あの真ん中にいる娘が平沢さんの姉って事は俺と同じ中学出身の田井中だっただけ、誰だろう？

俺はステージの上に立っている女の子四人を見比べるが誰も見た覚えがなかった。

そんなことをやっていると平沢さん（姉）が喋り終え演奏が始まった。

何でも題名は私の恋はホッチキスだそうだ。

ずいぶん大胆な題名をつけるな。

曲は中盤になり梓の方を見るとあの顔をしていた。家族の俺しか分からないであろう、あの顔。

昔からそうだった梓は何か感動した時や、特別な何かを感じた時いつも……

眼を驚かせ、口を閉じ、胸の前で手を握りしめ、心を感動させる。

昔からの梓の癖。

俺は梓の兄だから分かる、梓の心はもう決まったのだ。

この瞬間に……だって兄弟ってのは趣味や考えが似ているとよく言うがまさにその言葉が今は一番あうだろう……そう俺も今この演奏に感動したのだから。

翌日梓は軽音楽部に入部した。

俺が妹に恋をするかもしれない？（後書き）

感想、ご意見があれば気軽にどうぞ。

俺が妹に嫌われるかもしれない

「あの・・・楽器は何が好きですか？」

「ギターとか・・・」

「・・・そうなんだ」

「「・・・」」

再び長い沈黙

俺は「中野柳」

いま俺は訳あって音楽室にいるのだが・・・正直来なければ良かったと思っっている。

過去にメールを送ることができれば俺は迷わずこう送るだろう。

「音楽室 放課後 一時間後 行くべし」

目の前には先程から微妙に俺に話をかけ、長目に沈黙というワルツを奏でているのが、「秋本漣」さんである。

人見知りなのか、会話のキャッチボールが苦手なのか分からないが困ったものである。

この重苦しい空気は・・・

正直俺はこういうタイプの人を嫌いではない、嫌いではないが苦手である。

まあ俺も女の子と喋ると言えば世界一可愛いであろう妹と母さんぐらいなもんで他人と喋るのは馴れていない。喋り続けていけばいずれボロがでてくるであろう。

まあなんにせよ、ここまでの経緯を話すには昨日の夜に話を戻さなければならぬ。

晩御飯を食い終え部屋で読みかけの本を取ろうとした時に最愛の妹が俺に相談を持ち掛けてきたのである。

「なるほどね、つまり梓は軽音部に入部したのは良いが殆ど練習もしないし茶一ばかり飲んで先輩達に呆れてるっていうことだな」俺は梓に相談された内容を復唱した。

「呆れてるわけじゃないけど・・・」梓は弁明するように慌てて言う。

「分かってるよ、梓はあんな演奏をした先輩達と自分も一緒に演奏をしたい、だから真面目に練習してほしい・・・そう思ってるんだ」

俺がそう言うと梓は驚いた顔をした。

「どうしてわかったの？」

「そりゃ分かるさ、妹のことならなんでも知ってるさ、兄だから俺が言うと梓は今度嫌な感じの顔をした。」

「どうした？」

気になって聞くべきじゃなかった。

「なんかお兄ちゃんの最近そついうの・・・
嫌・・・」

鼓膜が破けるかと思った。

最愛の妹は俺に死の呪文を唱えたのだろうか？

「・・・えつと梓・・・なんで？」

俺は全身を震わせながら先程聞いた言葉の真意を確かめてみる。

梓はモジモジしながらこう答えた。

「・・・嫌って言う訳じゃないけど・・・気持ち悪い感じがして嫌・・・」

うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

心のガラスはもうヒビが割れて粉々である。

た、確かに最近はずも思春期で俺に対して素っ気ない態度やカリカリした態度をとることが多々見受けられる。

しかし、兄としてみればそこもまた梓の可愛い所であるが今回は胸に響いた。

今回の事を糧にして今後は無いように気を付けよう。

今後また同じことをして梓に嫌われたりするのには絶対に避けなければならぬ。

「う、ごめん！今度から言葉には気を付けるよ・・・なっ」

兄が妹に頭を下げたりするのは情けない風に見えるかもしれないが、一向に俺は構わない。
今回の相談もそうだが俺は梓のためにできることなら何でもしてやりたいと思っっている、そう昔から俺は梓の役に立てるだけで幸せなのだから。

「・・・うん」

一段落し俺は梓に、

「とりあえず梓、部活の事は俺にまかせろ
そう告げた。

「で、でも任せるってどうするの?」

そう聞かれた俺は一つ作戦があるのだが明日の梓の予定+この作戦を梓に言ったらを考えるとこう答えた。

「いいから、ちょっと時間をくれないか? えっと明後日までだけ
ど、いいな?」

俺は梓に心配をされないように立ち振る舞う

「本当に大丈夫?」

「ああ、任せておけて」

それだけ聞くと梓は納得をしてくれたのかどうか分からないが部屋を後にした。

さて、そうは言ったけどどうするか悩む所だ・・・仕方ない直球勝

負といくか。

と言うことで翌日の放課後俺は入部希望者として音楽室の前に立っているのだが・・・どうしたものか・・・

音楽室は空いてなく部屋の中に人の気配はない。

そもそも今日は部活休みなのかと考えていると・・・

「あの・・・なにか用ですか？」

後ろから声をかけられたので振り向くとそこにはそこには女の子が立っていた。

かなりの美人がそこにたっていた。

なんて例えるべきか俺のパツと身は「古き良き女性」っていう感じだけど。髪も真っ黒で腰にまで届く髪はこの子をより一層美しく写していた。

その時の俺に少なからず言えることは妹の事を数秒忘れ、

彼女に見とれていた

と言う事だろう。

俺が妹に嫌われるかもしれない(後書き)

次回もなるべく早く更新できればいいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5985x/>

俺の妹は世界で一番可愛い

2011年10月22日02時24分発行